

木曾三川流域における歴史情報資源の研究と活用

秋山 晶則

本学附属図書館所蔵の高木家文書は、愛知・岐阜・三重の三県にまたがる木曾三川流域における近世・近代の自然環境や歴史・文化・技術等に関わる第一級の史料群である(旧旗本・高木家には、西・東・北の三家があり、附属図書館では本家の西高木家文書約10万点を所蔵)。附属図書館研究開発室では、その整理・研究とともに、電子図書館構築の一環として、教育・研究への活用をむけた電子化事業を推進しつつある。

加えて、平成14年度に新設された地域貢献特別支援事業費(文部科学省)の措置をうけ、岐阜県内で発見された北高木家関係文書(約4,500点、近く目録公開予定)をはじめ、学内外の関連史資料の整理・研究・デジタルア

カイブ化にも着手している。引き続き平成15・16年度地域貢献特別支援事業として、「木曾三川流域の歴史情報資源の研究と活用」プロジェクトが採択されたことから、目下、愛知県及び岐阜県上石津町の各教育委員会との連携のもと、附属図書館所蔵高木家文書と密接不可分な関



写真1

Contents

木曾三川流域における歴史情報資源の研究と活用	1	和歌の書物	6
Science Citation Index における引用のバリエーション： 最近の事例をもとに	4	2004年春季特別展・講演会のご案内	8
		彙報	8

係にある東高木家文書（5,000点以上、岐阜県海津町・森川勝之助氏所蔵）を中心に調査を進めているところである。ここでは、その経過報告をかねて、調査概況および若干の展望について記すことにしたい。

冒頭に掲げたのは、この東高木家文書中から見つかった寛保2年（1742）9月の木曾三川流域を描いた「大概御案内絵図控」（60.2×82.2cm、写真1）で、差出は「勢州桑名郡池内村・油島村庄屋源左衛門」とある。この寛保2年には、当時木曾三川治水を管掌していた多良（旗本高木家）・笠松（幕府代官）の両役所が、流域73か村の要求を受け、流域の村役人とともに海口まで大規模な河川調査を行ったことが知られており、その概念図も紹介されている（松原義継『本阿弥輪中』二宮書店、1977年）。本図は、それとは異なる視点で描かれたもので、案内を担った村役人が作成した粗絵図と考えられる。

ここには、木曾・長良・揖斐の木曾三川が、図の右から左へと網の目状に流下するさまが描かれているが、注目すべきは、灰色の彩色で強調された土砂堆積状況である。図の上部には、養老山地から排出される多量の土砂が断層谷を埋めつくす様子が見えている。また、三川のうち流送土砂量が最大である木曾川筋では、佐屋川を分岐する下祖父江村の地先に砂州が描かれ、下流部の海老江・筏川や鍋田・加路戸川は土砂で埋まっている。さらに、海口となる桑名沖にも巨大な砂州が出現しており、墨色で螺旋状に描かれた点線部分は、その付近で行われた流下実験の結果を示したものと思われるが、流れが澱

み、三川全体で流下障害が生じていることを強く訴えるものとなっている（写真2・土砂堆積は、ダム問題等而言及される通り、現代でも難問である）。

北高木家関係文書等によれば、流域村々では河川環境をこのように認識し、寛保元年冬、多良・笠松役所に願書を提出している。それは、障害となる場所の取り払いや土砂浚渫（図の赤線部分）、三川が合流する油島の地先に150間の築流し堤を設置することなど（図の橙線部分）、三川分流への過渡的構想を、江戸直訴をも厭わぬ強い姿勢で願い出たものであった。

これらの要求に対し多良・笠松両役所では、幕府勘定奉行に調査許可を求め、翌年9月に調査を実施した結果、流域村々の指摘通りの土砂堆積・流下障害を認め、油島地先150間築流し堤を設置して水筋を分離するなどの対策を幕府に建言している。これは、村々の提案の妥当性を認めたもので、両役所としても三川分流に言及した初見かと思われる。

因みに、木曾三川流域では、養老断層にそって沈みこむ東高西低の土地傾斜（濃尾傾動地塊）に規定された自然環境のもと、宝暦治水（1754～55年）やのちの明治改修事業にみられるように、抜本的対策として三川分流が目指されていくが、この構想自体は、井沢弥惣兵衛（吉宗政権で重用され、1735～37年、勘定吟味役のまま美濃郡代を兼任）の創案によるものとされてきた。しかし、それを証する史料は確認されておらず、むしろ、前掲図や北高木家文書等の関連史料から注目されるのは、流域

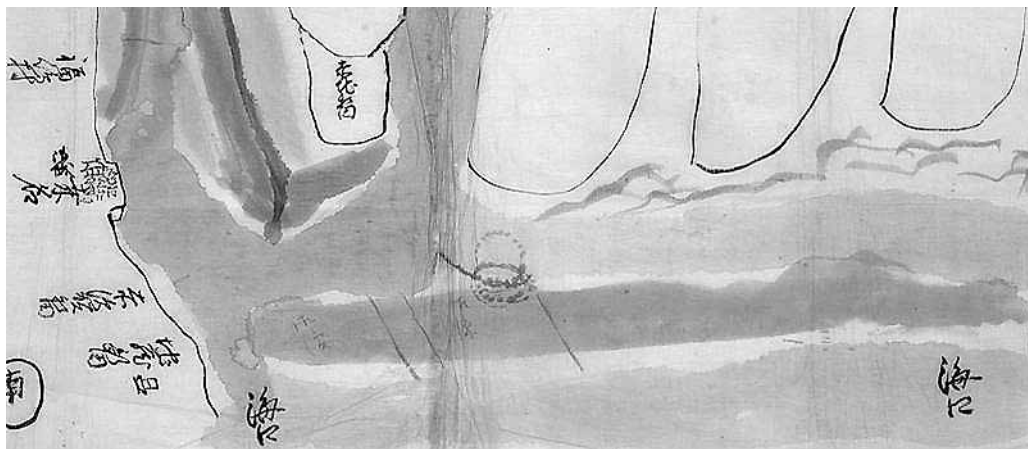


写真2



写真3

村々の河相分析・環境認識のあり方と、多数の利害関係村々をまとめあげ、交渉を行う地域の力である。従来の流域治水史は、幕藩領主権力の施策に強く引きつける形で描かれてきたが、今後の研究においては、こうした地域社会の動向も含み込むことで、豊かな歴史像を結べるようになるのではなかろうか。

ところで、この東高木家文書は、戦前（1930年前後か）に東高木家が放出し、散逸のおそれが出たため、高木家と関係する桑原権之助家（現上石津町、住居は国重要文化財）の縁者で、治水史に深い関心を寄せていた森川家に引き取られたものと考えられるが、本文書群の伝来については、他にも注目すべき点がある。

それは、「川通御用書類」等の墨書がある大型の木箱に格納された状態で伝わったことである（写真3）。その箱書きや文書群中の一件袋にある整理の痕跡からすると、天保期、東高木家で川通役人を勤めた平塚習という人物が、それまでの河川支配関係の書類を整理して保存・格納したものようである。今後、これらの史料を科学的に活用するには、文書群の構造分析が不可避となるが、このような保存・整理に関する情報は大変重要であり、その分析を通して、その他の関連文書群についても新しい知見が得られるのではないかと期待している。

本図の情報も含め、本年度調査にかかる成果の一端については、流域の教育委員会と連携し、岐阜県上石津町（2003年12月6日）及び愛知県弥富町（2004年3月6日）

で講演を行い、地域の方々と意見交換の場を持つことができた。また、こうした交流を通じて、地域資料の所在など有益な情報も寄せられており、今後の調査に是非とも活用したいと考えている。

なお、このプロジェクトを通じての私たちの目標は、地域における文化財保存とその活用支援、電子図書館機能を発展させたコラボレーションシステム開発による、自然と人間の関係史を中心とする生涯教育・総合的学習へのコンテンツ提供、地域研究の活性化を図り、成果を共有すること、である。

現在、上記～に共通する基礎的作業として、史料調査と並行しながら文書補修・写真撮影を行い、デジタルコンテンツ化を進めつつある。既に附属図書館所蔵高木家文書に関しては、治水史料の目録データベース化、及び検索機能を備えたプロトタイプシステムを構築済みである（治水分野以外の文書整理・電子化作業は今後の課題）。さらにについても、ユーザーから寄せられた情報を資料体にフィードバックして活用可能な双方向システムを開発中であり、次年度には、高精細画像や掲示板機能を付加し、Web上でも公開することで、地域との情報共有をさらに進めていく計画である。

このに関連して、本年度は、治水史料以外にも、流域の自然環境情報を豊富に含む伊藤圭介文庫（附属図書館所蔵）を調査し、メタデータ作成を行った。その成果を土台に、各種検索機能を搭載したうえで、自然と人間の関係史を再考するデジタルコンテンツとして提供を開始することができた。

以上の如く、当該流域には、国内外でも飛び抜けた規模の治水史料群をはじめ、貴重な歴史情報資源が多数伝来している。これらの膨大な資源の高度活用を図るには、新しい情報技術をベースに、横断的な相互検索等を可能とする情報環境の整備が不可欠である。地域に遺された歴史情報資源の保存と高度活用という共通課題に向かって、古文書などの歴史情報資源に通じた地域諸機関や諸個人の連携が図れるならば、大きな成果が期待できるであろう。本プロジェクトが、その一契機ともなるよう努めたいと考えている。

（附属図書館研究開発室専任助手 / 日本史学）

Science Citation Index における引用のバリエーション: 最近の事例をもとに

安井 裕美子

1. Science Citation Index (SCI) とは

Science Citation Index (SCI) は、Thomson ISI (設立時は Institute for Scientific Information, 以下 ISI 社と称す) が1963年から提供している、自然科学分野の学術論文を対象とした、引用調査のツールである。対象となるデータは定期的に更新されており、その量は膨大であることを以下の表に示す。

表1 SCIにおけるデータの更新状況

収録対象雑誌 (タイトル数)	6,034
追加される文献数 / 週	18,800
追加される引用文献数 / 週	431,000

“Web of Science v6.1 セミナーガイド”⁽¹⁾より引用

SCI を用いると、ある論文がどのような論文を引用しているのか、また、どのような論文にどれくらい引用されているのか (被引用回数) といった引用・被引用状況を調査することができる。

一般的に、より多く引用された論文はより価値の高い内容を含んでいると判断されることから、より質の高い研究を調査するのに有用なツールであるといえる。またその応用として、研究の評価指標としても用いられている。

2. 名古屋大学における Science Citation Index (SCI) の利用

表2 ISI Web of Science で提供されている SCI の、名古屋大学における導入状況

年月日	トピック	利用可能範囲
2002年1月	トライアル開始	1945年以降
2002年3月	本運用開始	1991年以降
2002年12月	追加購入	1975年以降
2003年12月	追加購入	1965年以降

左の表は、ISI Web of Science で提供されている SCI の、名古屋大学における導入状況を示したものである (注1)。次第に契約範囲が拡大され、今では1965年から現在までのデータを利用できることがわかる。

なお、利用料は定額制であることから、個々の利用者が使用する度に利用料を支払う必要はない。

一方、国立情報学研究所 (NII) の NACSIS-IR で提供されている SCI (以下 SCI (IR) と称す) を使用することもできるが、こちらは使用する都度利用料を支払う従量制 (注2) であり、収録データは1983年から現在までとなっている。

このように、SCI (ISI) の収録範囲が拡大されたことと、料金制度のことを鑑みて、利用者は SCI (IR) から SCI (ISI) へ移行すると考えていた。

しかし両データベースにおいて検索結果の異なることがあり、そのために SCI (ISI) へ移行し兼ねる場合があると聞いて不可解に感じていたところ、具体的な事例に行き当たったので、ここに紹介する。

3. SCI における引用のバリエーション

データの齟齬といった場合、まず原因として考えられるのは、収録範囲の違いによる影響である。しかしこの場合に問題となったのは1996年に発行された以下の論文であり、収録範囲には影響されない年代と考えられるものである。

Miyake, Y. et al. Occult macular dystrophy. American journal of ophthalmology. 1996, vol.122, no.5, p.644-653.

この論文の被引用回数について2004年1月22日に検索を行ったところ、SCI (IR) では22件、SCI (ISI) では21件であり、それらの書誌事項を出力し、両者を比較して差分を特定したところ、以下の論文が SCI (IR) では欠落していることがわかった。

Moschos, M. et al. Assessment of macular function by multifocal electroretinogram before and after epimacular membrane surgery. Retina, 2001, vol.21,

no.6, p.590-595.

そこで、なぜ被引用件数が異なるのか、NII および ISI 社の担当部署へ電子メールで理由を尋ねた。

また、引用文献のレファレンス部分を確認したところ、被引用文献の掲載された巻号の発行年が誤って1999年（正しくは1996年）と引用されていることが判明した。これが引用のバリエーション（論文著者の誤記による引用間違い）である。SCIの引用データは論文著者の記述がそのまま収録されているため、このようなことが起こり得る。しかし実際とは異なる情報が記されているため、被引用件数にカウントされないという問題が生じるのである。

さらに、引用論文を SCI (ISI) および SCI (IR) で検索すると、前者においては引用のバリエーションが修正されているのに対して、後者ではされていない。このことから、被引用件数が異なる理由は、引用のバリエーションが修正されているか否かによるものであると推測された。

その後、ISI 社からの返信を受信した。概要を以下にあげる。

- ・データの誤りについては、クレームがあれば修正している。
- ・NII には修正データを提供していない。修正データの更新は複雑な作業であり、そのための特別なプログラムは ISI Web of Science のインターネット版サーバのみが有するものである。
- ・ISI Web of Science を使用するにあたって、引用のバリエーションにも留意する必要がある。

追って NII から返信があった。概要は以下のとおりである。

- ・NII は ISI 社からデータを購入しているが、データの修正に関する情報は寄せられていなかった。
- ・著作権は ISI 社にあるため、無断でデータを修正することはできない。今後の対応を検討する。

これにより、この事例において被引用件数が異なった理由は、引用のバリエーションに対する修正の有無によるものであることが確認された。

4. 研究評価ツールとしての SCI

引用のバリエーションの課題とその対処法については、以前から指摘されてきた。

ISI 社は ISI Web of Science のセミナーガイドにおいて、引用のバリエーションに留意する必要性を指摘するとともに対処方法を解説しており⁽¹⁾、緑川信之も1991年の記事において同様の指摘を行っている⁽²⁾。

しかし引用調査においては、様々な課題が残されている。

2000年10月8日に開催された ISI 公開シンポジウム“今、問われる研究評価：引用情報の応用”において D. Pendlebury は、引用分析は有力な手法であるが、適切な取り扱いが必要であると注意を喚起している⁽³⁾。

その他にも、“そもそも引用データベースは情報の海を航海する道具として開発されたもの”⁽⁴⁾であり、研究の評価に用いるのは副次的な機能であることが指摘されている⁽⁵⁾。

SCIの創始者である E. Garfield は、被引用数を元に算出されたインパクトファクターは、研究評価において少なからず誤用されてきたと述べている⁽⁶⁾。また、自然科学分野においては特に、引用は必ずしも肯定的な行為ではないと述べ、過度の自己引用などといった問題があることに触れながらも、引用データは量・質の両面における評価ツールとして有用であると結論付けている⁽⁷⁾。

5. まとめ

本稿では、引用のバリエーションを事例として取り上げ、研究評価ツールとしての SCI についても言及した。SCI を研究評価ツールとして使いこなすためには、様々な状況を考慮して的確に対処することが不可欠であるといえる。本稿で紹介した引用のバリエーションも考慮すべき状況のひとつであることから、本稿が何かの参考になれば幸いである。

【注】

注1: ISI Web of Science は以下の3つのデータベースから成るが、本稿では筆頭の SCI のみを取り上げた。

- ・ Science Citation Index Expanded
- ・ Social Sciences Citation Index
- ・ Arts & Humanities Citation Index

注2: NACSIS-IR でサービスされている SCI の利用料金は、接続料が1分あたり50円、ヒット料（文献の書誌情報や抄録の出力）が1件あたり13円である。

<http://www.nii.ac.jp/ir/ir-j.html>（参照2004 - 2 - 23）

【文献】

- (1) ISI 社. “Web of Science v6.1 セミナーガイド”.
<http://www.isinet.com/japan/resources/index.html> ,
(参照2004 - 2 - 23).
 - (2) 緑川信之. サイテーション・インデックスとその応用. 化学と工業. vol.44, no.1, 1991, p.160 - 163.
 - (3) Pendlebury, David A.. "The ISI database and bibliometrics: Uses & abuses in evaluating research".
<http://www.isinet.com/japan/symposium/dp/> ,(参照2004 - 2 - 23).
- 以下はその抄訳である。
- Pendlebury, David A. “引用分析の10原則(抄訳)”.
http://www.isinet.com/japan/symposium/dp/index_j.html ,(参照2004 - 2 - 23).
- (4) Garfield, E. サイエンス・サイテーション・インデックスの生みの親：研究者の文献要求をめぐる問題解決か

- ら生まれた ISI. 情報管理. vol.42, no.11, 2000, p.951 - 955.
- (5) 田中秀明. Web of Science を用いた研究評価の試みと留意点. 情報管理. vol.44, no.1, 2001, p.2 - 7.
- (6) Garfield, Eugene. "The use of JCR and JPI in Measuring Short and Long Term Journal Impact".
<http://www.garfield.library.upenn.edu/papers/cseimpactfactor05092000.html> ,(参照2004 - 2 - 23).
- (7) Garfield, Eugene and Welljams-Dorof. Citation data: their use as quantitative indicators for science and technology evaluation and policy-making. Alfred. Science & Public Policy, vol.19, no.5, 1992, p.321-327.
[http://www.garfield.library.upenn.edu/papers/sciandpubpolv19\(5\)p321y1992.html](http://www.garfield.library.upenn.edu/papers/sciandpubpolv19(5)p321y1992.html) ,(参照2004 - 2 - 23).

(附属図書館医学部分館)

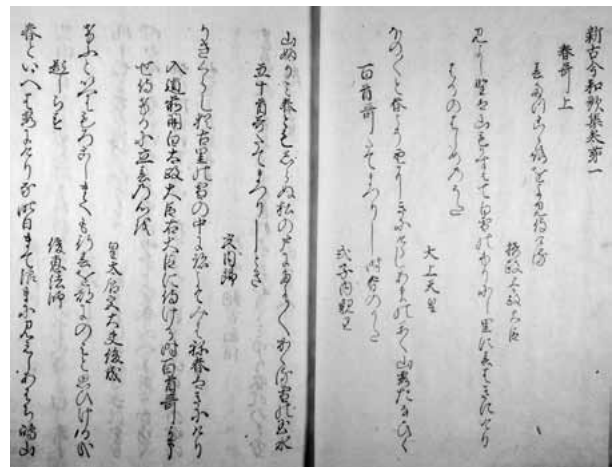
うた 和歌の書物

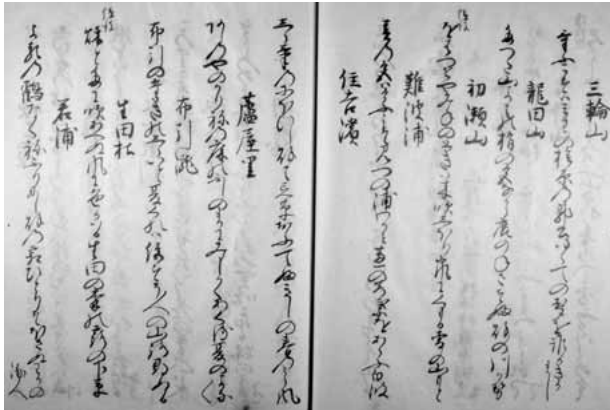
大井田 晴彦

春の訪れを喜び、散る花を惜しみ、かなわぬ恋を嘆き、親しい人の死を悼む、はるか万葉の時代から、人々はさまざまな思いを三十一文字に託してきました。時代とともに変遷を繰り返しつつも、決して途切れることなく、日本の文芸の主流を占めてきたのが和歌でした。人々は、和歌をかけがえのないものとして、大切に書き留め、歌集を編みました。こうした営みは、文化の伝統と、自身の生の軌跡を後世に伝えようとする情熱のなすところだったと言えます。多くの書物が残されたおかげで、現代の私たちは、いにしへの歌人たちと向き合い、その喜びや悲しみをともに分かち合うことができます。そして、これらの書物は、その装丁、料紙、また字配りなど、細やかな配慮がなされており、すぐれた芸術作品ともなっています。

このたび、本学名誉教授後藤重郎氏のご芳志により、多くの『新古今和歌集』関係の貴重な書籍が本学に寄贈されました。これを機に、今回は、「和歌の書物 新古今

和歌集とその周辺」と題し、本学所蔵のさまざまな歌集、歌論書を展示いたします。副題にもありますように、『新古今和歌集』をはじめとする中世の和歌に関する書物が中心となります。『新古今集』は、鎌倉初期に、後鳥羽院の勅命により編集された八番目の勅撰和歌集です。院





をはじめ、西行・藤原俊成・定家・良経・宮内卿・式子内親王など当代歌人はもとより、前代の柿本人麻呂・紀貫之・和泉式部など多くの錚々たる歌人の珠玉の作が並んでいます。しばしば『万葉集』『古今集』と並び称せられますが、浪漫的で、優美繊細な『新古今』調を最も好み、愛唱する人も少なくないでしょう。展示の概要は、次のようになります。

1. 特集・新古今和歌集

【1】新古今和歌集と王朝文化... 後鳥羽院と新古今和歌集 王朝文化の受容と変容 詠作と理論のテーマからなります。王朝政治の復興を夢に見、新古今集の編纂を命じた後鳥羽院、本歌取りに見る王朝文化へのあこがれ、和歌を理論的に支える歌論などについて見ていきます。

【2】新古今和歌集とその時代... 戦乱の時代のさなかに 新古今時代の開幕 新古今の歌人たち—西行 新古今の歌人たち 鴨長明 新古今の歌人たち—藤原定家 新古今時代の終焉 御子左家の分裂 のテーマのもと、当時の時代背景と個性豊かな歌人たちについて見ていきます。『拾遺愚草』『いざよひ物語』『玉伝深秘』など、貴重な珍しい書物が並びます。

【3】版本のさまざま...江戸時代に出版された新古今集の版本は30種あまりにもおよびますが、その多くが後藤氏から寄贈されました。その伝流と系統について、実際に書物を取り上げながら、紹介していきます。珍しい古活字本、香川景樹の書き入れなども展示します。

2. 歌まなびの世界

師から弟子へ、受け継がれる うた

近世和歌の始発 後水尾歌壇 御師の文芸 のテーマのもと、主に近世期の歌まなびの実態を伝える書物を紹介します。

3. 和歌の注釈とその変遷

和歌はどのように読まれてきたか

有名な和歌でも、解釈の揺れているものは少なくありません。定家の「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮れ」(新古今集・秋上)がどのように理解されてきたのか、『美濃の家つと』『尾張の家苞』などいくつかの注釈書を比較しながら、見ていきます。

『新古今集』の成立したころは、戦乱に明け暮れていた時代でした。現代の世相に通ずるところがあるようにも思えます。不安と動揺の時代にあって、文化を大事に育み後世に伝えようとした人々がいました。彼らの営みに思いをはせることは、現代に生きる私たちにとって大きな指針となるのではないのでしょうか。

展示期間中、別記のように、本学の院生によるガイドも予定しています。また、4月17日(土)13時から5階多目的室においてギャラリートーク「新古今和歌集とその時代」が開催されます。講師は田中喜美春先生(元名古屋大学教授)・島田修三先生(愛知淑徳大学教授・歌人)のお二人と、大学院文学研究科助教授大井田晴彦です。

(特別展実行委員・文学研究科助教授/日本文学)



2004年春季特別展・講演会のご案内

展示会

「和歌（うた）の書物 新古今和歌集とその周辺」

3月23日（火）～4月21日（水） 10：00～17：00（土・日とも）3月25日（木）は休館日
場所：名古屋大学中央図書館4F展示室

展示ガイド 3月26日（金）
4月は毎週月・木曜（1、5、8、12、15、19日）
時間はいずれも13：00～17：00

ギャラリートーク

「新古今和歌集とその時代」

4月17日（土） 13：00～15：30
場所：名古屋大学中央図書館5F多目的室

講師：田中喜美春（元名古屋大学教授）
島田 修三（愛知淑徳大学教授・歌人）
大井田晴彦（名古屋大学文学研究科助教授）

主催：名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

問い合わせ先：TEL052-789-3667 附属図書館情報管理課庶務掛
E-mail：shomu@nul.nagoya-u.ac.jp

彙報

2003年

9月8日 第4回教官会

10月17日～30日

伊藤圭介生誕200年記念展

10月18日 記念展講演会

10月20日 第5回教官会

11月10日 第6回教官会

12月1日 第5回懇談会

12月11日 第7回教官会

2004年

1月26日 第8回教官会

1月26日 第6回懇談会

2月23日 第9回教官会

2月27日 第7回懇談会

3月8日 電子図書館国際WS

LIBST Newsletter No.4

編集・発行

名古屋大学附属図書館 研究開発室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

TEL 052(789)5699